九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

奥村三雄著『聚分韻略の研究』

田尻，英三
鹿児島大学講師

https://doi.org/10.15017/12138

出版情報：語文研究. 38, pp.48-51, 1975-01-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

奥村三雄著『聚分韻略の研究 付古本四種影印 慶長版総索引』

田尻英三

本書は、第一部　聚分韻略の基礎的研究、第二部　聚分韻略諸本の複製、第三部　慶長壬子版聚分韻略総索引　の三部より成っている。

以下、第一部より順を追って、内容の簡単な紹介を行なう。

まず、第一部聚分韻略の基礎的研究では、聚分韻略の諸本数十種を、原形本・三重韻本・別種改編本の三種に大別し、その各々について更に細かな分類がなされているが、このような聚分韻略の精緻な分類は本書をもって始めとするもので、例えば、三重韻本付訓刻本については、「見出し字に関する増補の有無」という点を重視し、五十種以上にのぼる版種を分類整理されるなど、著者の綿密なる調査結果の集積により体系化されたものである。この分類表が、今後の聚分韻略の諸本を考える上で基礎となることは、「ここに漏れたものを補ってゆく事により、この分類表が多少ユレるという様な面もありそうであるが、しかし、根本的な体系は動かないはずである」という著者の言葉の如くである。

次に、原形本の性格については、意味分類・韻分類などの点から論じておられるが、この聚分韻略の特徴ともいうべき、韻書でありながら意味分類を含むという点については、橋本進吉氏の如く、「分類体を韻書に応用したのは虎関の独創」とはいえないにしても、聚分韻略の一二門目の直接の典拠は不詳であり、むしろ虎関自身のくふうによる所が多かったということと、色葉字類妙や天理本韻字集などの古辞書の意味分類と比較しながら論じておられる。又、韻分類についても、一応広韻またはそれに準ずる韻書の通用韻をまとめて、一一三類に整理して出来たものと見なされるとされ、従来の説の如く、新刊礼部韻略・韻会挙要・韻府群玉などの類が、直接影響した考えに対して、童蒙頌韻・反音抄・宇鏡抄・広韻・集韻・礼部韻略などとの比較により、疑問を呈しておられる。

聚分韻略の成立事情に関し、注目される国会図書館蔵の略韻については、その成立年次・韻目表示・見出し字の配列順序・見出し字に付されている漢字注・音訓カナなどを聚分韻略の各版と比較し、現存聚分韻略よりも古態を保っている点・新しい点などを具体的に指摘する事により、略韻は聚分韻略の増補改編本の一本であるが、他の増補改編本の如く「直接的な親子関係ではなく、兄弟関係或は従兄弟関係の如きものと見なさねば

なるまい」とされている。

更に、前章で扱った聚分韻略各版について、三重韻本への改編・カナ付刻本の成立・見出し字配列の改変・見出し字の増補・漢字注の増補・版式の小型本化などの点に注目して、聚分韻略各版について史的位置づけを行ない、韻書的機能・作詩参考書的機能の他に、節用的機能も増す事により、後の節用集や温故知新書へと発展して行く方向づけを行っている。特に三重韻本については、その成立・影響関係・付刻されている音訓カナの性質についても言及されている。

その三重韻本のうち、慶長一七年版を総索引の底本としているが、この版は刊行年次の明らかな付刻版中最古のものである。第三部にある総索引を利用する際、当然問題となる付訓の性格であるが、著者は、中世無訓版の加筆カナとの比較を行い、特に、唐音語形については、中世版諸本の加筆唐音と類似がみられる事、訓カナについては、国会図書館蔵文明一三年版と類似がみられる事などを指摘し、更に、他版との影響関係についても言及され、「或種の中世版聚分韻略加筆カナがかなり影響した」と認められるものの、具体的な「出自関係全般については今後にまつ所が多い」と結論しておられる。

研究編の最後の章としては、「国語史料として見た聚分韻略」がある。この章では聚分韻略に加筆・付刻されたカナが問題となるのであるが、訓カナについては前章などで詳細に扱かわれているので、音カナの分析に主眼がおかれている。聚分韻略が韻書であるから、字音研究資料として種々の有意義な面をもっている事は当然考えられるが、聚分韻書においては加筆・付刻の音カナが唐音研究に資する所大であるのは、従来よりしばしば言われていることである。

しかし、その唐音研究自体まだ十分に体系化されていないのが現状であるが、著者はその唐音を、臨済曹洞系唐音に準ずる中世的唐音・黄檗系唐音を含む近世的唐音・和製的唐音の三種に類別し、その各々について実例を示すことにより、全体的なわくづけを示されている。

例えば、慶長一七年版付刻カナにみられる中世的唐音は、舌上音のサ行表記・疑母の一部（y音などを含む場合）のナ行表記、疑母のア・ワ・ヤ行表記・暁母の一部のヒ表記・匣母のア・ワ行表記、止摂歯音四等（または二等）のス表記・止摂合口音のi表記、魚虞韻のi表記・斉韻のiイ表記・灰韻のuイ表記・文韻のiン表記・歌・戈韻のo表記・江宕摂以外の喉内鼻韻尾ン表記・入声韻尾の無表記などの特徴を示す。

この中世的唐音の資料については、従来、臨済曹洞宗関係の観音懺法や諸清規などの諷経音や、禅宗関係の資料としての金沢本正法眼蔵・岸部本般若心経、更には下学集、撮壌集・節用集・新韻集などがあげられていた。しかし、これらは、成立年次が新しいため国語音韻変化の影響をうけ、かな遣いの混同表記がかなり多かったり、古い文献の場合も唐音カナが量的に少なかったり。唐音と漢呉音との判別が難かしかったりして、聚分韻略に比べて資料的価値が低いようであるとされる。

このような点を論ずる際には、当然唐音語形の判定が前提となるわけであるが、例えば慶長一七年版の場合、ごく一部の例外を除き、おおむね見出し字の右側のカナが唐音を示すと考え

られる事が内部徴証によっても裏付けられる事など、無訓版諸本加筆の音カナの取扱いに比べて利点がある。

ただこの場合、例外の処理として、唐音語形の違いは中国原音の差に基くという考え方を安直にもち出す事を危険視しておられる。その点については、類推的字音形（和製唐音）の判定をする場合により具体的に現われる。享保四年版を例にとると、類推的字音形の特徴は、流摂のン表記・蟹摂のン表記・入声音の無表記・止摂のe表記・仮摂のo表記・登・等・嶝韻のuン表記などである。これらは、例えば、有坂秀世氏紹介の岡西赤子の随筆『消閑雑記』にみられる「唐音を弁ずる歌」の如きものの適用により、誤って類推された語形であるとされる。（この点について、湯沢質幸氏が『国語学』九八集の本書の書評中で、『中国音韻学』の「方言字彙」により、温州・上海の方音をあげて論じておられるが、このような方法について問題がある事は、唐音の研究方法の根本にかかわる事だけに、著者の説の妥当性と共に明らかにせねばならない。）

以上略述した如く、研究編の第一章から第七章までは極めて緊密な関係を示しており、当然のことながらその一部分のみをとりあげて云々する事は、著者の意図に反するものであり、又誤った解釈をするおそれもでてくる。

（前掲湯沢氏の書評で、国会図書館本略韻が聚分韻略の増補本系の一本であっても、他の延宝版の如き増補改編版の類とは異なり、聚分韻略の原形を反映して古さを示している点があると述べている個所（第四章、四）をとりあげて、著者が略韻と聚分韻略との成立の先後関係を明示する事を「留保したのではないか」とされる点など。尚、同氏の書評ペ四三下一〇行の「慶長壬子版」は「聚分韻略原形本」の誤り。）

次に、第二部聚分韻略諸本の複製では、索引編の底本として刊行年次の明らかな付訓本中最古の版である慶長一七年版、最古の三重韻版とみられる文明一三年版・南北朝開版で室町期の音訓カナが付されている無刊記原形十行版の各聚分韻略と国会図書館本の略韻が複製され、特に、慶長版は検索の便として、複製版の上欄に三重韻の平上去と同じく三段に分けて、その各々の見出し字について通し番号が付されている。これは単なる検索の簡易化のみならず、見出し字の順序・増補関係について、他本と比較をする際の便を考慮したものと思われる。

第三部慶長壬子版聚分韻略総索引は、三二四ペにわたる詳細なものであり、本書の特色ともいうべきものの一つである。これは慶長版の訓力ナ索引・音カナ索引の他に漢字索引があり、それには見出し字の丁数・通し番号の他、韻鏡上の位置が明示してある。従来、各漢字の韻鏡上の位置の比定については、馬渕和夫氏の『韻鏡校本と広韻索引』にたよっていたが、この広韻索引は部分的に問題点を有しており、利用者はその点の注意を払わねばならなかった。著者は本書の漢字索引を作製するにあたって、馬渕氏の前著に細かな検討を加え、訂正増補する場合にはその旨を明示している。例えば、「夢」を馬渕氏は一転去声ホの一等所属としているが、広韻の「莫鳳切」という反切や、韻鏡開鵞、磨光韻鏡・漢呉音図・隋唐音図などにより、三等所属韻としているなどである。

この漢字索引により、単に聚分韻略記載の文字の韻鏡上の比

定にとどまらず、広韻索引の性格をもち、日本漢字音研究上の必須の基礎資料になっているのである。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきたのだが、研究編の紹介など粗雑に扱った難をまぬがれえず、誤りもおかしているのではないかとおそれている。著者の御寛恕をお願いする次第である。

（昭和四十八年六月　風間書房刊　一八、〇〇〇円）

受贈雑誌③

／国語国文学誌（広島女学院大）3／愛媛国文と教育（愛媛大）5／愛媛国文研究（愛媛大）23／愛媛大学法文学部論集6／高知大国文4／日本文学研究（高知）11／文芸と思想（福岡女子大）38／西南文学（西南学院大）1巻1／会誌語学と文学（九州女子大）4／国語研究（九州大谷下2／国語の研究（大分大）8／別府大学国語国文学15／国文学研究（梅光女学院大）9／国語国文学研究（熊本大）9／国語国文薩摩路（鹿児島大）18／鹿児島大学法文学部紀要9／沖縄国際大学文学部紀要1巻1／近代文学考2／国語学94～96／白路29巻1～6／文学史研究2／海事史研究21／鑿国365～369／訓点語と訓点資料54／万葉櫂木1／藤風文芸6／日本学術会議月報14巻11～15巻4／万葉83／潮流4～9／近世文芸資料と考証8／近世初期文芸3／九州文化史研究所紀要（九州大）19／文学論輯（九州大）21／文学研究（九州大）71